

勉強会 『学芸の森の植栽』

講師：三上常夫氏

日時：2007年1月12日 17:00～19:00

場所：20周年記念飯島会館 第三会議室

植木に関する職業というのは、普通の場合、農家の長男がそっくり受け継ぐのが普通ですが、私の場合は例外的でした。社会人になって、初めのうちは10回ほど職を変遷しましたが、それが今となっては糧となっているところがありますが、中でも、京都の造園の名門である、井上設計事務所で庭作りを勉強したことは、とても有意義な経験でした。ただ、私はそれだけでは満足できず、いろいろなことに挑戦してきました。個人の庭作りをしたこともありますし、公共の場所の樹木を選定し植栽することもずいぶん手がけてきました。また、当時、日本では珍しかったグランドカバーデザインも独学しその草分けとなりました。さらに、コンテナ栽培やコニファー類の植栽についても海外へ行って勉強し、それらを我が国へ導入しました。

海外へ行くと、植物の品種の多さに驚きを感じます。たとえばヒマラヤスギは日本では1種しかないと思われがちですが、外国には品種がたくさんあるのです。イチョウだってそうです。葉が幾つかに割れる品種があるかと思えば、横に広がらない品種もあります。皆さんは驚くかもしれませんがイチョウには92品種も登録されているのです。このように樹木には、想像以上にいろいろなものがあります。是非、それらを楽しんでもらいたいものです。

木を森を健やかに育てるためには、放っておけばよいというものではありません。人の手が加わることも時には大切です。自然のままに置かれている皇居の樹木も、場所によっては手をつけないために、かえって衰えてしまったものもあるのです。実は、皇居の中には江戸時代からそのままの状態に残っている樹林は多くないのです。昔はモミノキの林がありましたが、現在モミノキは7本しか残っていません。この原因として通気性の悪さがあげられます。

コナラなどの雑木林で名高い武蔵野の木々も、江戸時代には25年に一遍は皆伐されていました。これは、江戸の町で使用する薪として使うためです。里山と呼ばれるところは、皆そうですが、人の手が加わることによって、シュランやクサボケなど、さまざまな草がいたる所に生えていたのです。自然を手つかずのままにしておくことが、自然と考える人がいますが、多様な植物を生やすためには、それではいけないのです。

学芸大には大きく育ったケヤキがたくさんあります。しかし、これらも将来のことを考えると、このまま放置しておくべきではありません。たとえば、噴水池の周辺のケヤキは7本伐採することが必要です。そうしないと、ただ単に過密に枝が繁るだけで、一本一本の木は弱ってしまいます。あと50年、100年のことを考えれば、これは必要なことなのです。木を抜くことで緑は減ります。しかし、それは一時的なものであり、しばらくすれば、残った木々のそれぞれが、ケヤキらしい樹形の整った立派な木に育つのです。間伐をすることで残った木々が若返って元気になるのです。木をよりよく育てるためにも伐採は大切なのです。日本の各地に、大木、巨木と呼ばれる樹木がありますが、それらの多くで、周りに他の木がないことを考えれば、これは理解できることでしょう。

木は寿命があります。これを見極めて切るものは切る、残すものは残すという基本計画をしっかり立てることが必要です。例えば正門並木のサクラですが、あれはどれも寿命に近づいています。自然館南側に植えられたハナミズキも寿命で、これ以上育つことはありません。ハナミズキは自生地のアメリカでは森の周辺部に生えている中木で、森の中にはコリノキなどの高木が生えているのです。老化した木の脇には必ず若い木を植えることが必要です。そうすることにより、木の寿命が尽きた後も、若木がその場所で替わりをするようになるのです。

附属中学校の北側に生えるイチョウの並木は、木々が混みすぎています。これなどは、もっと早く手を打つべきで、20年前に間木を抜いていれば、一本一本がイチョウらしい形をした見事な並木になっていたはずで。

ヒマラヤスギも大学にはたくさん植わっています。この木やカロリナポプラ、アオギリ、ニセアカシアなどは、過去に流行った木で、早く育って大きくなる木です。植木にも流行廃りがあり、大学の体育科棟の北側にあるサンゴジュなどは、今ではもう植えられません。これは、町中から生け垣が無くなり、目隠し用に使われた中木を庭木として植える必要が無くなってきたからです。ところで、大学のヒマラヤスギは、手を加えずに放って置いたため、軸が複数になっているものが幾つもあります。ヒマラヤスギは芯が1本だけあり、それが真っ直ぐに上に向かって育つのが樹形が綺麗な円錐形になり理想的です。軸が複数あるものは、上部が重くなり強風が吹いたとき倒れることがあり危険です。ヒマラヤスギの自生地は、あまり風がないのですが、日本の場合は台風もありますので考えないといけません。今からでも遅くないので、芯を1本にして、頭を軽くすることを勧めます。

植栽においては自生種を守るべきです。その一方、場所によっては、外国産のおしゃれな木を植えるのも、植物の楽しみ方の一つです。イギリスの国土に現在のイギリス人の祖先が移住した当時は、氷河期の影響で樹木の数は大変少なかったそうですが、その後、彼らは世界中から植物を持ち込み、国内の植物を豊かにしました。面白いことに、その植物が自生地に最も適合しているかという、そうでもないのです。例えば、ハンカチノキは自生地である中国の山の中では、決して大きな木はないのですが、イギリスへ行くと直径3メートルになるような大きな木があるのです。

身近な緑は色彩があって、香りがあってもっと楽しめるものです。百年後を考えて、基本計画を立てることが必要です。できれば専門家に依頼するのもよいでしょう。そうすれば、いつ、何をしたらよいか、そのために何をすればよいかかわってきます。そして、大きくなる木は、なるべく大きく育てる。小さな木は、枝を切ることで、なるべく高さを抑えることも必要です。小さな木が、大きくなってしまうと、木自体を楽しむことができなくなるばかりか、寿命も短くなってしまいます。人間の目線は自然と下を向くものです。アオキやニッコウヒバはもっと背を低くすべきですし、ツツジも短く枝を切るべきでしょう。枝の切り方として差し替えがあります。この方法では、年ごとに何本かずつ枝を切ることで、高さを抑えて、新しい枝を生やすことができます。歳をとった樹木を長生きさせる方法もあります。泥捲きという手法では、樹木の下に縄を撒いてどろを塗るのです。こうすると、その下から根がたくさん出て、最後はそれがくっついてしまい樹皮となり、樹木を頑丈に支えることができるのです。しかし、この方法をすべての樹木に施すのは大変なことです。やはり、早いうちから次の木を育てていくことが大切です。

講師プロフィール：(株)緑創代表。日本植木協会による優秀技能認定者。「記念樹」、「新しい植木事典」、「グランドカバープランツ」、「コニファー」、「緑化樹木ガイドブック」などの著書のほか、雑誌、報告書へ寄稿多数。